

初期ドゥルーズにおける差異の問題

「ベルクソンにおける差異の考え方」を中心に

得能 想平(大阪大学)

本発表は、一九五〇年代において若きドゥルーズが取り組んだ差異の問題とその解決の方向性を、当時のコンテキストを参照しながら示すものである。端的に言えば、ここでの差異とは個性性を指す。さらに差異の問題は、個性としての人間を例に以下のように記述できる。人間は、自然によって規定された存在者であると同時に、社会によっても規定された存在者である。しかし、このように普遍的な仕方では規定される人間は、同時に他の人から区別される個性性をも持たねばならない。これらの条件を満たす人間をどのように考えることができるのか。差異の問題とはこのようなものである。

差異の問題は、ドゥルーズにのみ見られるものではない。先立つ一九四〇年代において、サルトル、メルロ＝ポンティといった実存主義者たちが、すでに自然的かつ社会的に規定された人間の個性性をとらえる「主体性」の考え方をよく知られたものにしてきた。彼らは、単位となる刺激と印象の一対一対応を認める素朴な経験主義的な意識の考え方や、超越論的統覚のもとで経験を説明するカント主義的な主体の考え方を批判し、認識に対する実践の優位を認めながら社会的かつ自然的に規定される個性性を、二つの極を持つ環世界としてとらえる議論が提出していた。いわゆる「対自存在」と「対他存在」の「対立」(サルトル)ないし、「対自存在」の「対他存在」からの「分化」(メルロ＝ポンティ)の議論は、どちらも実践のための道具として現れる諸事物の在り方と、そのような直接的な行為の対象に還元されない他者性ないし言語の在り方を区別し、これらの在り方の組み合わせによって、差異の問題を論じたものと見なすことができる。

こうした状況を背景に、ドゥルーズの指導教官であるジャン・イポリットは『論理と実存』において、実存主義的なヘーゲル読解を背景にして、この問題に取り組み、「内的差異」としての個性概念を提出していた。ドゥルーズは一九五三年に書かれたこの『論理と実存』についての書評の中で、差異の問題を考えるうえでのイポリットの「絶対者批判」を取り上げ評価する一方で、ライプニッツの不可識別者同一の原理によって定式化される矛盾としての個性の考え方を批判していた。本発表はこのような当時の文脈の延長線上においてドゥルーズのベルクソン論をとらえるものである。ドゥルーズのベルクソン論がヘーゲル批判を目的としていることは、たびたび指摘されてきたが、それはヘーゲル哲学一般に対する批判ではなく、実存主義の問題を背景としたイポリットのヘーゲル読解に対する批判であることを示したのは、ジュゼッペ・ピアンコの功績である。

本発表は、初期ドゥルーズのベルクソン論において、「対自―対他」の二極的な主体性の考え方が読み込まれていることを確認したうえで、ドゥルーズのベルクソン論を、行為論ないし他者論的な差異の考え方から存在論的な差異の考え方への移行を論じたものとして読解する。実存主義的な差異の考え方においては、諸事物は行為の手段として論じられ、それに対して他者は所与として与えられている「対他存在」から分化するものとしてみなされ、道具と他者の関係性から個体的な人間のあり方が問題とされていた。それに対して、ドゥルーズは人間だけでなく諸事物一般を定式化する個性概念を、科学との関係から問題にしたとわれわれは考える。本発表では、諸事物一般としての個性

概念を定める問いを存在論と見なす。初期ドゥルーズのベルクソン論では、科学的認識における事物も人間と同様に環境と同様にとらえられる点が注目され、人間と事物がおのおのの個性にとっての現れの中にいかにして共存するかという問いを経由することで、諸事物一般の個性概念を論じているといえる。われわれは、その結論として見いだされる「一切が緊張とエネルギーの変化であり、他の何ものでもない」とするドゥルーズの立場を確認することを第一の目標とする。

本発表の第二の目標は、初期ドゥルーズの哲学の進展のうちに、ベルクソン論を位置付けることである。ドゥルーズは、細かな言及も含めるならば、終生にわたってベルクソン哲学について言及しつづけたといってもよい。ところで、本稿は、その中でもドゥルーズ哲学の初期である一九五六年に書かれた「ベルクソンにおける差異の考え方」を中心に論じたい。というのも、ヒュームからベルクソンへの移行として捉えられる初期ドゥルーズの思考の進展を描くためには、一九五三年に出版されたヒューム論『経験論と主体性』との関係がはっきりとみられるこの論考の議論が多いに参考になるからである。『経験論と主体性』において、ドゥルーズはすでに「合目的性」という観点から、不十分な仕方ではあったが、存在論の問題について取り組んでいた。本稿は、ドゥルーズのヒューム論とベルクソン論の関係についても言及したい。さらに、われわれは適宜同年に書かれた「ベルクソン、1859-1941」ないし一九六六年にかかれた著作『ベルクソニズム』を参照する。

本発表の試みは以下のような観点で意義があると考えられる。第一に、これまでの先行研究においてドゥルーズの差異概念は、『差異と反復』で論じられるような特異性ないしその表象不可能性によって定義されていたため、いかにしてその差異を言語化できるのかという観点から理論的困難が指摘されていた(cf.メイ)。それに対して、われわれは差異を社会と自然によって規定された個性性として捉えなおすことで、ドゥルーズの差異の議論の射程を大きく広げることができると考えられる。第二に、これまでドゥルーズのベルクソン論は、認識論的な観点にとどまる現象学批判として読み解かれることが多かった(cf.バウダス)。しかし本発表は、実存主義の文脈にドゥルーズのベルクソン読解を位置付け直すことで、ドゥルーズ哲学と現象学との共通点と相違点を明確にすることに寄与すると思われる。第三に、これまでのドゥルーズのベルクソンは、ドゥルーズが後年の「千のプラトー」においてバフチン由来で導入する「自由間接話法」についての議論が読み込まれ、ドゥルーズにとってのベルクソンと、ベルクソンそのものの読解が区別されず、ベルクソン―ドゥルーズといった形で、恣意的に論じられることがあった。本発表では差異の問題という観点から、ドゥルーズにとってのベルクソン読解の価値を明らかにすることで、この区別の問題に寄与すると思われる。

結論として、われわれはこのドゥルーズの存在論的な差異の考え方と以降のドゥルーズの著作との関係についても簡単な見直しを与えたい。